九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

関係性動詞の装定用法のル形、タ形の相違について

趙, 海城
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程

松村, 瑞子
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門・言語教育学講座

https://doi.org/10.15017/6796491

出版情報：言語科学. 44, pp.25-32, 2009-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

関係性動詞の装定用法のル形、タ形の相違について

趙　海城[1]・松村瑞子

1. はじめに

関係性動詞の装定用法について、従来ル形とタ形で使われ、その両者の間に意味や用法の差異がほとんどないとされている。

(1) a 真宗に付属する古刹(島崎藤村「破戒」)[2]
　　b 学校に付属した教会(田山花袋「蒲団」)

しかし、それらの結論は実証的に得られたものではない。意味や用法の差異がほとんどないとされているにも関わらず両形の共存する理由や、両形の意味的差異は明らかにされていない。

(2) a 患者の感染に対する抵抗力と介護者の負担を勘案しながら，適した方法を選択する必要がある。(川廷宗之「介護保険実践ハンドブック」)
　　b ？患者の感染に対する抵抗力と介護者の負担を勘案しながら，適する方法を選択する必要がある。

本稿は「BCCWJ2008モニター版」から用例を収集し、収集した実例を基に検討し、関係性動詞の装定用法の「ル形、タ形」の意味的異同を解明しようとする。

2. 先行研究

ここではまず、「違う」「違った」の装定用法を考察対象とした研究を概観し、次に、関係性動詞全般の装定用法、述定用法に関する記述を見る。

宮地(1962)、橋本(1964)は「違う色」「違った色」を内省に基づいて考察した結果、「タ」がつくほうが、「多少はっきり確認的にものを言うニュアンスがあるように思われるが、ほとんど意味は違わない（宮地：1962)」、「両者に違いがあるとすれば、伝えるべき内容やことがらに関する判断のしかたの違いではなく、それが状態を表していることの確からしさの違いにある(橋本：1964)」としている。一方、鈴木(1971)は実例の分析に基づいて、装定用法の「違う」はより動作性が強く、「違った」はより状態性が強く、「違った」のほうがそれにつく名詞との間の結びつきが密接で、連体詞的であると結論付けている。

金田一(1950)から始まり、町田(1989)、朴(1993)、高橋(1994)、高橋他(2005)等では、「違う」「含む」などの関係を表す動詞は文末でル形、テイル形で使われ、両形はアスペクト的対立をも

[1] 比較社会文化学府博士後期課程
[2] 高橋(1994：45)より引用

たらさず、装定用法として、ル形とタ形の両方に使われ、その両方の間に意味の違いがないとされてきた。また、日本語記述文法研究会(2007)も、「関連する」「異なる」等を挙げ、関係性動詞は、名詞修飾をする場合には基本的にル形・テイル形・タ形ともに用いられるが、三者が同じ意味を表すものとしている。

山岡(2000)は関係動詞の意味成立には話者の照合行為の介在が必要不可欠だとした上で、関係動詞のル形とテイル形の述定用法の文法的特徴の違いについて以下のように帰納している。

①ル形で関係叙述文の述語となり、その場合のアスペクト意味・時制意味は潜在相・超時時制である。

②テイル形で関係描写文の述語となり、その場合のアスペクト意味・時制意味は実現状態相・現在時制である。

このように、「違う」「違った」の装定用法を考察した先行研究は幾つかある。しかし、「多少はっきり確認的にものを言うニュアンス」や「状態を表していることの確からしさの違い」とは一体どういう違いかなのかははっきりしない。たとえ「違う」「違った」にそのような違いがあるとしても、ほかの関係性動詞にも同様な違いがあるのかを検証する必要がある。また、関係性動詞の述定用法のル形とテイル形のアスペクト・テンスの違いは装定用法で保持されるかどうか検討する必要もある。

そこで、本稿では同じく装定用法のル形とタ形には意味・用法にさほど違いはないとされてきた「劣る」「由来する」「適する」「関連する」「属する」「関わる」[3]を取り上げ、そのル形、タ形を実証的に考察し、両者に違いが見られるのか、違いがある場合、それがいかなるもので、どういった形式的特徴に反映されるのかを明らかにしたい[4]。

3. 使用データと用例数

本稿は「BCCWJ2008 モニター版」から用例を収集した。述定用法も分析に必要であるので、併記した。「BCCWJ2008 モニター版」(DVD) には以下のような４種類の資料が収められている。今回はすべてを検索対象とした。検索ツールは「ひまわり」を利用した[5]。

●書籍：約 1,300 万語 (4,669 サンプル)

●白書：約 500 万語 (1,500 サンプル)

●Yahoo!知恵袋：約 500 万語 (45,725 サンプル)

---

[3] 工藤(1995)、須田(2003)、山岡(2000)、日本語記述文法研究会(2007)の中で２文献以上取り上げられ、しかも述定用法のル形とテイル形の意味の違いがないとされたものという基準を設け、数多くの関係性動詞の中からこれらの動詞を選定した。

[4] 内省や作例の問題点、コーパスから実例を収集する利点の一つとして、田野村(2003)は「複数の類義的な形式が等しく文法的でありながら文脈によって使用頻度に目立った違いがあるとか、１つの形式が特定の種類の表現とはよく組み合わせられるがほかの種類の表現とは組み合わせられることが相対的に少ないというような、統計的な偏りの現象が言語の至るところで見られる。内省はこうした現象を明らかにする手段としてはきわめて非力である。(中略)現実の用例を観察し分析するという作業が不可欠となる」と述べている。

[5] http://www.kokken.go.jp/lrc/index.php?%C1%B4%CA%B8%B8%A1%BA%F7%A5%B7%A5%B9%A5%C6%A5%E0%A1%D8%A4%D2%A4%DE%A4%EF%A4%EA%A1%D9

●国会会議録：約 500 万語（159 サンプル）

表 1　「BCCWJ2008 モニター版」から収集した用例数

動詞	関係性動詞である場合の意味タイプ[6]	装定用法		述定用法		
		ル形	タ形	ル形	タ形	テイル形
劣る	評価	47	16	7	0	5
由来する	起源・みなもと	64	3	24	1	9
関連する	関連・むすびつき	407	101	6	0	23
属する	分類的	340	11	27	3	21
関わる	関連・むすびつき	1012	67	19	3	33
適する	調和・適合	*28*	*202*	5	0	23

関係性動詞の装定用法を見ると、ル形とタ形の使用頻度に差があることが分かる。今回収集した用例に限って言えば、「適する」を除いて、従来指摘されているように、ル形の使用頻度がタ形よりはるかに高いことが分かる。「適する」のみル形より、タ形のほうが使用頻度が高い。ル形とタ形の使用頻度にこれだけ開きがあることは両形になんらかの意味的相違があることを示唆しているのではないか。

4. ル形とタ形の意味的相違

4.1　本稿の主張

上に取り上げた動詞はその語彙的意味においても、統語的特徴にもさまざまな様相を呈するが、本稿では、装定用法の「ル」形は「述定を兼ねた装定」として、述定用法に近い機能をしており、それぞれの述定用法で関係叙述に必要な背後に介在する主観的な比較・判断行為が装定用法でも残ると考える。また、「ル」形は特定の時間に囚われることなく、一般的な静的関係状態を表すとともに、潜在的な動作性も保持されると思われる。一方、装定用法の「タ」形は「純粋な装定」で、状態を表す接尾語「タ」の影響もあり、より状態的で、しかもその状態は現実的に捉えやすく、特定の時点における状態であると見る。実例に基づいた考察では両者のこういった違いは統語的特徴に現れる。

4.2　「純粋な装定」のタ形と「述定を兼ねた装定」のル形

寺村(1984:200-206)では、装定には「純粋な装定」「述定を兼ねた装定」があると述べている。

(3)a. きのう { はげしい / *はげしかった } 雨が降りました。

6 ここでの意味的タイプについて、須田(2003)に従った。

b. ｛*はげしい／はげしかった｝雨が、夕方やっと小降りになった。

(3a)のような装定は「純粋な装定」で、「本来の形容詞としての性格を強くもち、ある具体的な事柄を描くコトのかなめである述語としての性格がうすい。あるいは述語性を全く失ってしまっている」と規定している。それに対し、(3b)のような装定を「述定を兼ねた装定」と名づけ、「具体的な事柄を描くかなめである述語としての性格を強くもつ」としている。

寺村(1984)の用語を借りて、本稿ではタ形で用いられる関係性動詞の装定用法を「純粋な装定」とし、ル形で用いられる装定用法を「述定を兼ねた装定」とする。その根拠は使用法にあり、関係性動詞のタ形は装定用法しか持っていないこと、ル形は装定用法も述定用法もあることによる。

確かに表1のように、動詞の述定用法にもタ形が使われているが、以下の用例(4)～(7)から分かるように、述定用法においては、いずれもある時点において関係の成立や実現が示されているもので、関係性動詞ではあるが、変化動詞的に使われており[7]、客観世界に表れた事象の変化を描写しており、完成相過去というテンス・アスペクト的意味を表すものと思われる。

(4)軽市、河内には餌香市、阿斗桑市があるなど、各地の交通の要衝に大小の市が開かれた。多くは自然発生的に生まれた原初的な市に由来した。(木下正史「よみがえる日本最初の都城」)

(5)明治四年（一八七一）の廃藩置県後、藩校は盛岡県に属した。(宮永孝「日本洋学史」)

(6 選手村、東海道新幹線、首都高速道路、地下鉄、東京モノレールなどの建設が進められた。世田谷区は、これらの事業に深くかかわった。(佐々木隆爾「21世紀の新しい自治体行政への挑戦」)

(7)つまり、玄関はもともとは幽玄の道への入り口であった。やがて、玄関は禅に入門することを意味した。しかし、それはさらに意味が転じて禅寺の方丈の入り口（しきり）を意味するようになっていった。(柏木博「「しきり」の文化論」)

一方、ル形で用いられる関係性動詞の装定用法は述定用法と同じ形態で使われ、述定用法に近づき、「述定を兼ねた装定」の機能をすると思われる。装定用法の例文(10) ～(13)に用いられている関係性動詞のル形の意味は (8) 、(9)とさほど変わらないと思われる。(10)、(12)、(13)の例では、関係性動詞は形式上主名詞を修飾しているが、意味的には主題(この本、その論文、口述筆記という仕事)についての説明であり、むしろ主題との関係が密接である。(11)も文に開くとき、「医薬及び医薬品は食品安全とともに生命に関わる」となる。

---

[7] 吉川 (1971:184、221)では「テクル、テイク」の形をとって過程を表すようになる、単なる状態を表す動詞を「潜在的過程動詞」と呼んでいる。また、日本記述文法研究会(2007 : 102)では、この用法をその状態への変化を表す動き動詞としての用法になるとし、「状態動詞の変化動詞的使用」と呼んでいる。吉川、日本記述文法研究会は関係性動詞が「テクル、テイク」の形で用いられる場合に限定して、変化動詞的に使用されるとしているが、本稿ではタ形で過去において関係の成立や実現を表す場合も変化動詞的に使われていると見る。

(8)時間や空間、抽象的に言えば、まわりの時空をどう見るかは、まわりの世界をどう見るかであって、ヒトが物をどう見るかに関わる。(森毅「科学の 10 冊」)

(9)家事・育児を最優先事項とし、それに支障のないかぎりで働くパートタイムの既婚女性も、この定義づけにしたがえば、「主婦」に属する。(伊藤美登里「共同の時間と自分の時間」)

(10)それで生物学などを支配しようとするのが帝国主義というわけだが、この本は逆だ。時空のときに触れたように、生物学に関わることで、数学や物理学の発想がゆらぐのだ。(森毅「科学の 10 冊」)

(11)食品安全とともに生命に関わる医薬及び医薬品の扱いについて聞いておきたいと思いますが…。(「国会会議録」)

(12)このケンブリッジ滞在で博士論文を仕上げて帰国したが、その論文はＭＩＴの経済学に属するものであり、いまだブレイクできなかったのである。(藪下史郎「スティグリッツと新しい経済学」)

(13)口述筆記という仕事は、私にとって未知の領域に属する仕事であった。(小池真理子「恋」)

4.3 統語的差異

4.3.1「適する」「適した」と程度副詞との共起頻度

「適する」は程度副詞の修飾を受けたのは 28 例中(14)のような 1 例のみであるのに対し、「適した」は程度副詞の修飾を受けた文は 202 例中 30 例にものぼる。程度副詞は「最も、一番、至極、真に、ほんとうに」のような程度が高いことを表すものである。程度副詞を始めとする程度表現は本来ものの性質・状態を表す形容詞を修飾するものであるが、高橋他(2005:155)にあるように「動詞であっても、状態や性質を表す動詞や、…は程度の限定を受けることができる」のである。

では、「適する」は状態を表す動詞であるにもかかわらず、どうして装定用法で「ル」形ではなく、「タ」形が程度副詞と共起しやすいか。それは、「適した」がより現実的な状態性が強いため、程度副詞の修飾を受けやすいと思われる。翻って言えば、状態の程度を限定する程度副詞によって顕在化される状態性は「適した」のほうがより多く備わっているので、両者は共起しやすいと言えよう。

(14)御承知のように、ことしは、限りある財源で景気浮揚の効果に最もやはり適するものは公共事業であろうということで、それに重点を置かしていただいたわけでございます。(国会会議録)

(15)ここは空気が澄んでいて本当に星を見るのに適した場所で、いくつも天文台がある。しかし、着いた日はどしゃぶりの雨であった。(椎名誠「ハリセンボンの逆襲」)

(16)メーカーではその車に最も適したＰＲ（プライ）を設定しています。(Yahoo!知恵袋)

(17)それはともかくその時春吉君は藤井先生がこの片田舎の、学問の出来ない、下劣で野卑な生徒たちに至極適した先生になられたことを感じたのである。(新美南吉/川島隆太「列車・小僧の神様」)

4.3.2 装定用法のタ形

例文(18)～(23)において、いずれも既定事実(主観世界における既定事実)を述べる文脈になっており、こういった文においては、山岡(2000)で言う照合行為にあたる主観的確認行為がすでに実現され、特定の時間に現れるより現実的な状態が描写されている。

関係性動詞の装定用法のタ形について、金水(2000:86－87)では、形状動詞のタ形を含めて「形容詞相当の状態的な表現であることを示す形態」とまとめている。また時枝(1950:148)でも、「「タ」は状態を表す接尾語と認めるべきだとしている。つまり、関係性動詞の装定用法のタ形は状態を表す形態であるということである。

(18)万が一、その人（現在の最高額入札者＝取消し依頼者）が落札した場合のもっとも適した対応の仕方を教えてください。(Yahoo!知恵袋)

(19)武霊王は、西北の異民族から騎馬を導入し、騎乗に適したスボン型の「胡服」を採用し、騎馬隊を編成したのである。（湯浅邦弘「よみがえる中国の兵法」）

(20) システムの利用が高度化するに伴い，処理する情報がぼう大かつ多様となり，更に各業務ごとに独立した処理だけでなく各業務間相互に関連した処理が必要となってきている。(総務省情報通信経済室「通信白書」)

(21) 全国的に欧米並みの酸性雨が観測されており（全平均値ｐＨ４．７７)、また、日本海側の地域では大陸に由来した汚染物質の流入が示唆された。(環境省総合環境政策局環境計画課「環境白書」)

(22)結局は、輪島は自分が属した花籠部屋という名門の部屋の娘と結婚することで、その借金をチャラにしようとしたのです。(鷲田小彌太「社会に出てから役に立つ考え方」)

(23)右近は、その間、金沢城の修復に任じたほか、西軍に属した山口玄蕃のこもる大聖寺城（石川県加賀市）攻撃に従軍している。(清水紘一「日本、キリスト教との邂逅」)

4.3.3 装定用法のル形

次の例（24）（25）を見ると、方針や計画のようなもので、いずれも一般論的な説明、特定の時間とは結びがたい記述になっている。これは白書というジャンルの文書の特徴でもあろう。

(24) 高レベル放射性廃棄物については，安定な形態に固化し，処分に適する状態になるまで冷却のための貯蔵を行い，その後地層に処分することを基本方針としている。(内閣府原子力委員会事務局「原子力白書」)

(25) 観光都市，観光地，温泉地において外国人旅行者の宿泊に適する日本旅館の発展向上を図る。(国土交通省総合政策局観光経済課「観光白書」)

例(26)(27)を見てみると、「通俗小説の部類に属するもの、基礎分野に属する研究」のように、「部分と全体、要素と集合」のような客観的関係を叙述する。誰であろうと、いつであろうと、主観的判断行為を行えば、『永すぎた春』と通俗小説、経常研究と研究の包含関係が成立するので

ある。つまり、両者の間に時間と関係なく、一般化された包含関係が存在しているのである。ただし、このような関係が成立するには、判断行為の介在が必要である。

(26)三島由紀夫の小説に『永すぎた春』(昭和三十一年刊)というのがある。通俗小説の部類に属するものだが、当時の古本市場の風景が出てくるので、興味深いものがある。(青木正美「古本屋五十年」)

(27)経常研究は，比較的基礎分野に属する研究を中心として経常的に行われる研究で，あらゆる研究活動の基礎を培っているものである。(文部科学省科学技術・学術政策局　調査調整課「科学技術白書」)

(28)新たに，自分の体に気付き，体の調子を整えることなどをねらいとした「体ほぐしの運動」に関わる内容を取り上げる。(文部科学省生涯学習政策局社会教育課「文部科学白書」)

(29)生徒指導に関わる事件や事故は、しばしばマスメディアをにぎわすが、このような教育現場で起きている事例を他人事としか見ない教師がいるとすれば･･･　(吉田卓司「生徒指導法を学ぶ」)

町田(1989)では「「関係」という概念の存在を真であると主張する文の背後には、話者の判断がかなりの程度介在している」と記述しており、また山岡(2000)には「複数の名詞的概念間の静的関係を叙述するためには、「照合行為」の介在が前提となる」と述べられているように、「適する」「属する」「関わる」のような述定用法のル形は静的関係状態を表すには主観的な比較・判断行為が背後に介在される必要がある。つまり、関係性動詞は状態動詞ではあるが、潜在的で、背後介在的であるものの、述定用法では話者の比較・判断行為が認められると思われる。むろん、主観的な比較・判断行為が常に文面に表れるのではなく、例(30)の「この定義づけにしたがえば」のように表れる場合もあるし、顕在的に表現されない場合もある。

(30＝9 再掲)家事・育児を最優先事項とし、それに支障のないかぎりで働くパートタイムの既婚女性も、この定義づけにしたがえば、「主婦」に属する。(伊藤美登里「共同の時間と自分の時間」)

そして、関係性動詞のル形の装定用法は「述定を兼ねた装定」として、述定用法に近い意味をすると思われる。装定用法のル形も主名詞と関係性動詞に関わるほかの名詞との静的な関係状態を記述すると同時に、その背後に介在する確認・判断行為、つまり潜在的な動作性を保持していると言える。

5. おわりに

本稿は、関係性動詞の装定用法をル形と夕形の間の意味的な異同点について、統語的特徴、使用文脈を手がかりに考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

装定用法の「ル」形は「述定を兼ねた装定」として、述定用法に近い機能をしており、それぞ

れの述定用法で関係叙述に必要な背後に介在する主観的な比較・判断行為が装定用法でも残る。また、「ル」形は特定の時間に囚われることなく、一般的な静的関係状態を表すとともに、潜在的な動作性も保持される。一方、「タ」形は状態を表す接尾語「タ」の影響もあり、より状態的で、しかもその状態は現実的に捉えやすく、特定の時点における状態であると見る。実例に基づいた考察では両者のこういった違いは統語的特徴にも反映される。

本稿では、もっぱら実例に基づき、共起成分を手掛かりに考察を進めてきた。例文の中にル形、タ形のいずれかの形で用いられているわけであるが、それが他方の形に置き換えてはいけないということを意味するものではない。例(31)のように、事実関係にほとんど違いをもたらさないため、実際に置き換えても全く問題のない用例もある。そのような用例では、ル形、タ形の意味的差異が潜在化して、共に静的関係状態を表すようなケースである。

(31)こうして「血と大地」を奉じる錬金術師の属したドイツ民族主義は敗北し、オーソン・ウェルズのいわゆる「フェイク」の達人ヒューズの属するアメリカが勝った。(種村季弘「偽書作家列伝」)

本稿で取り上げた関係性動詞の装定用法のル形とタ形について、以上のような相違が見られたが、文脈や統語的特徴に反映される違いはこれだけではないと思われる。個々の関係性動詞についてもっと詳しく考察する必要があり、今後の課題としたい。

参考文献

金田一春彦(編) (1950) : 国語動詞の一分類, 日本語動詞のアスペクト, むぎ書房 (1976)所収.

鈴木英夫(1971) : 連体法としての「違う」と「違った」—その実態と分析—, 国語と国文学, Vol. 48, No. 3, pp. 50-66.

高橋太郎(1994) : 動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失, むぎ書房.

高橋太郎(他) (2005) : 日本語の文法, ひつじ書房.

田野村忠温(2003) : コーパス言語学の可能性と限界, 日本学研究 13, 外語教学与研究出版社.

寺村秀夫(1984) : 日本語のシンタクスと意味Ⅱ, くろしお出版

時枝誠記(1950) : 日本文法口語篇, 岩波書店.

日本記述文法研究会(2007) : 現代日本語文法 3 , くろしお出版.

橋本四郎(1964) :「違う色」と「違った色」, 講座現代語 6.

朴長庚(著)/深見兼孝(訳) (1993) : 日本語の連体修飾構文における動詞形態の形式化、固定化とその類型, 世界の日本語教育 3, 国際交流基金日本語国際センター

益岡隆志(1995): 連体節の表現と主名詞の主題性, 日本語の主題と取り立て, くろしお出版.

町田健(1989) : 日本語の時制とアスペクト, アルク.

山岡政紀(2000) : 関係動詞の語彙と文法的特徴—照合行為の介在をめぐって—, 日本語科学 8, pp. 29-53.

宮地裕(1962) : 相談室, 言語生活, 130 号, pp. 92-93.

吉川武時(1971): 現代日本語動詞のアスペクトの研究, 日本語動詞のアスペクト, むぎ書房 (1976)所収.